死んだ少年は死ねない

かん太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死んだ少年は死ねない

【Ｎコード】
Ｎ９２７４Ｗ

【作者名】
かん太

【あらすじ】
――突然ですが、君は死にました。ゲームオーバーってやつだね。
そんなわけのわからない声が暗い世界で動けない少年の耳に聞こえる。まるでわけがわからない。さらにその声は新しい世界で生きていけばいい、なんてことを平然と言ってのけ、深い眠りに落ちた。いつもと変わらぬ朝に目を覚ましたのは自分の部屋。そこで平穏をこよなく愛する生活を送る高校生、新倉智之は異能者に襲われ、その命を落とす。

序

パトライトがいくつも集まる交差点。
野次馬の視線の先にガードレールを突き破り、壁に激突して止まっているトラック。
救助隊は二手に分かれて、任務を行っている。
ひと組はトラックの運転手の救助を、もうひと組はトラックの下にジャッキを入れ、下敷きになった人を救おうとする組だ。
「ありゃ助からねぇぞ……」
「あんなスピードで突っ込まれたんじゃあ……」
野次馬からは、そんな絶望じみた言葉しか聞かれないほどの惨状。
数十分前。ブレーキの利かなくなったトラックは急な坂を猛スピードで下り、歩いていた男子高校生をはね、壁に激突して止まった。
壁にぶつかったキャビンは、まるでプレス機に掛けられたように押しつぶされている。
燃料が漏れていることが分かると、より一層救助隊の声が荒々しくなり、周囲のヤジ馬を遠ざけ、作業を早める。
ようやく開いたキャビンのドアであった所から、ゆっくりと引っ張り出される肉塊。そう表現するしかないほど、ドライバーの体はつぶされ、救助隊員でさえ目をそらすほどの有様。
あわてて周囲をブルーシートで覆う警官。
一方、ようやく持ち上がった車体の下から、ひかれた男子高校生が引きずり出される。
トラック運転手とは対照的に、原形をしっかりととどめた体。
だが口から、腹部から大量の血を流すその体から、誰が生きていると思うものだろうか。
「そんな、どうして……」
「なんであいつが、こんなことになってんだよ、おい」
野次馬の最前列。ひかれた男子生徒と同じ学校の制服を着た男女

が、ブルーシートから垣間見えた彼を見た瞬間絶望に体を震わせ、女子生徒は膝から崩れ落ちた。
こうして一人の少年の人生は、不幸にも突如として終わりを告げる、はずだった。

――あれ、どうして真っ暗なんだ。
少年は暗い景色の中で目を覚ました。だが体がピクリとも動かない。
動かない。動かせない。まるで動かせる気がしない。
「ここは、どこなんだ」
声だけは出せることを確認すると、周りを見渡そうとする。
だが首どころか目も動かせない。真上を見るだけの眼には、やはり天井があるのかもわからない、どこまでも暗い空があった。
「やあ、なんか平然としてそうでなにより」
どこからか聞こえる女性の声。聞き覚えもないし、その声の主を探そうにも首を動かせない。
ただ言えるのは、まるでその声はこの空間自体から聞こえるようだということ。
「突然ですが、君は死にました。ゲームオーバーってやつだね」
わけがわからない。
「俺が死んだって？　そんなわけない。こうして声を出してる」
「それは私が許しているから。私が許せば首を振ることも、体を動かすこともできる」
声の主はまるで、彼の体を支配してると言わんばかりの口調。
「まあ君は生前の記憶なんて、今ないだろ？　どうして死んだのか。まあ、生まれ変わる前にはその前の記憶をまとめて、来世の糧にするもんなんだよ。こんな風にね」
手をたたく音が響くと、その少年の記憶と思しき風景がまるで走馬灯のように次々と流れる。
生まれた瞬間の景色、両親と遊ぶ景色、小学校の入学式の景色、

友達と遊んでいる景色。
すべて自分の見てきた視点で流れていくそれらは、見れば見るほど自分の記憶だと思いだしてゆく。
「ま、君は生まれ変わるわけじゃないから、こんなものを見ても仕方がない。それにこんなわけのわからないことをする必要も、ね」
再び手の叩く音とともに、流れていた記憶の走馬灯は消えて再び暗い天井に戻った。同時に今まで見てきた彼の記憶も消しとんだ。
「とにかく、君は死んだんだよ」
運がなかったね、と続いて嘲笑《ちょうしょう》。
「……俺は、どうなるんだ？」
「とりあえず、新しい世界に送ってあげるよ。その世界で君は暮らしていくだけ。まあちょっと変わったコンテニューだけどね。というわけで、楽しんできてね」
まるでわけのわからない回答。それと同時に襲われる恐ろしいまでの睡魔。
彼の意識は、底知れぬ闇の世界へと落ちてゆく――

序（後書き）

読んでいただいた方、ありがとうございます。
久々の投稿になります。以前は雪華というＰＮでやっていました。
実はこの作品もその時に投稿したのを、新しく手直ししたものになります。
以前投稿してから5年ほど経ちました。多少は腕が上がったかと思いきや、まったく進歩がなくてわけのわからない文章になって軽くショックを受けてます（汗）

中途半端でやめてしまったこの作品、今度はちゃんと完走します。
どしどしご意見ご感想いただき腕を上げていきたいと思いますので、長い目で見ていただければ幸いです。

では本編でお会いしましょう。

第一話「死」

隙間から洩れる太陽光を顔に浴びて、少年は目を覚ました。
ゆっくりと上半身を起こして、寝ぼけ眼で周囲を見渡す。
ベッドに寝ている自分、漫画が積まれた机、カーテンの合間から見える山と空。
別段、おかしな所のない自分の部屋。それを認識すると深く息を吐き、心を落ち着かせる。
いつも彼は起きるたびに周囲を確認する癖がある。それがなぜなのかは彼自身もよくわからない。それが終われば朝食作りにかかる。
手早く朝食を作るとリビングに並べ、テレビのニュースを見ながら食事を始める。
「昨夜未明、神奈川県堀滝市《ほりたきし》で男性の遺体が発見されました。発見したのは近所に住む女性で、夜に河原を散歩していた際、橋の下に血を流して横たわる男性を発見。病院に運ばれましたが、死亡が確認され……」
朝っぱらから何と物騒な事件だろう。
しかし、さほど彼の興味をそそる話題ではないのか、味噌汁をすすってはご飯を口に運んでいる。
「警視庁は殺人事件として、『異能者』の犯行も視野に入れて慎重な捜査を進めていくとのことです」
ニュースキャスターが締めくくると、すぐに別の話題に切り替わる。
「異能者ねぇ……」
自分たちよりも『身体能力がずば抜けている人々』というのが彼らの一般的な認識。　だから少年もさほど気にとめないし、なぜ警察はそんなことで慎重になるのかと、そこだけが気にかかった。
彼にとっては所詮同じ人間なのだ。
食事が終わって手際よく食器を片づけると、かばんを持って家を

出る。
瞬間、まぶしい太陽の光と恐ろしいまでの熱気に、少年はたじろいでしまう。
マンションの一角である自分の家のカギを閉めると、いつもの堤防沿いを歩き学校へ向かう。
波の音と潮の香りが、多少熱気を和らげてくれる。とはいえ高校生活最後の夏、こんなにうなだれることになるとは、まったくもってついていないと少年――新倉智之《にいくら　ともゆき》は思う。
ありがたみのない太陽の恵みを浴び、汗だくになりながらもようやく学校に到着し、教室に入ると彼の体をひんやりとした空気が包み込んだ。
自分の席について一息つくと、ようやく火照りがとれた気がした。
「よっ！　智之ぃ、今日もあっちぃな」
朝っぱらから元気のいいやつだ……
そんな友人がとても疎ましかった。とはいえそれはいつものことで、すっかり接し方も理解してしまった。
「よう永太。お前は相変わらずハイテンション―《能天気》だな」
「おい！　今『ハイテンション』の意味にとても失礼な言葉が混じってなかったか！？」
ズバッとキレのいいツッコミが入る。
「いいツッコミだ。だがネタとしてはまだまだだな」
もちろん裏はあるのだが、そんなことはないと言い捨てる。
「そ、そうか？　ならいいんだけどさ……」
どうも納得できていないような桜庭栄太《さくらば　えいた》だったが、気を取り直してニュースで流れていた殺人事件へ話題を進めた。
「隣の市だぜ？　マジ怖いって」
「ん？　ああ、別に。巻き込まれなきゃいいんだしな」
あっさりと流された。しかも否定の方向で。
「うぉい！　異能者だぜ！　俺らがかなうわけねぇ相手だぞ？」

なぜこんなに永太はハイなのか、いつものこととはいえ、やはり疎ましい。
「あー、異能者怖い、異能者怖い」
「まんじゅうみてぇな可愛いもんじゃねぇっつうの！」そんないつも通りの学業も終わり、まだ日の高い帰り道を暑さにうなだれながらマンションに到着する。
部屋に入るとすぐに冷房を入れ、涼しくなるのを待ってから夕食を作り始める。
彼には親がいない。まだ小さい頃に事故で亡くした。そして独立してからは家事全般を一人でこなせるようになった。彼が唯一周囲に誇れることだ。
手早く調理を終えた彼は、ニュースから昨日の続報と思われるニュースが流れ、テレビに目をやった。
「堀滝市での殺人事件の続報です。堀滝市の周辺を警察が検問していましたが、昨夜未明に何者かによって破られていたことが判明いたしました」　犯人は堀滝市の外に出たということか。
テーブルに料理を並べながらも、テレビからは目を離さない。口では気にしないといった智之だが、やはり誰かから話題に上れば、気にせざるを得ない心理が働く。
「犯人は県道に張られていた警察官5名ほどの検問を突破し、隣の月規市《つきのりし》に入ったとみて、捜査範囲を広げています」
「げっ、こっちに来やがった……」
そう、智之たちの住む月規市に犯人が入ったのだ。
「なお検問に勤めていた警察官は今朝、全員の死亡が確認されました。これを受けて警視庁は異能力特別捜査隊を出動させ、犯人逮捕に全力を挙げることにしています」
箸が止まった。そんな凶悪犯がこの町に入ってきたのだ。
月規市は広いとはいえ、ほとんどが山などで市街地は集中して二つあるだけ。
もし犯人が無差別に人を襲っているとすれば、当然遭遇する確率

は上がるわけで。
智之は心の底から遭遇しないことを祈った。この平穏な生活が続くことも含めて。
翌朝はあちらこちらが物々しい雰囲気に包まれていた。パトカーの往来が多く、警察官もよくみられる。本当に危ない場所になってしまったのだ。
「勘弁してくれよ、全く……」
深いため息をつきつつ、いつも通り堤防を歩く智之。すると背後から走ってくる足音が。
「ど、どいてください！」　振り向くのと、その足音の主とぶつかるのはほぼ同時だった。
「ぐっ、うえっ！」
とっさに身構える智之だったが、なんという偶然か、その足音の主はぶつかる直前で躓き、智之の腹部に見事なタックルを食らわせたのだ。
「ご、ごごご、ごめんなさい！」
声の主であるかわいらしい女子生徒は、小さな頭を下げて心から謝った。
「い、いや、ごふっ。見事なタックルだったぜ？」
当然タックルなど食らわせるつもりのなかった女子生徒は、大きくくりっとした目を開き、耳まで真っ赤に染めてもう一度謝った。
「いや、けがしてなかったからいいって。そっちは大丈夫？」「は、はい。その、あなたが下になってくれたので何とも……、あっ！」
と女子生徒は腕時計をみると、今度はおろおろと余計に取り乱し始めた。
「どうしたんだ？　なんか急ぎの用事でもあるのか？」
「あ、今日は私日直で、早く行かないといけないのに寝坊しちゃって！」
ドジっ子か、可愛いな。
なぜかほっこりとした顔をする智之は、よしと言って女子生徒の

手をとりたちあがらせると。
「走るぞ、ついてこいよ？」
「えっ、きゃっ！」
あくまで女子生徒が付いてこられるように気遣い、智之は走り始める。
堤防から市街地に入り、神社の脇をすり抜けて長い階段を上る。
「ほら、ついたぜ。もう学校は目の前だ」
智之の言うとおり、階段を上った先の小高い丘からは、歩いても二分ほどで着ける場所に学校が見えていた。
「あ、ありがとうございます。あの、手を離していただけませんか？」
お礼を言いつつ、走ったからなのか照れてなのか顔を赤面させ、女子生徒は目をそらす。
それに気づいて智之も顔を朱に染めながら手を離す。
「本当にありがとうございました。では急ぎますので失礼します」
もう一度、今度はお礼の意味を込めてかわいらしい小さな頭をペコリと下げ、女子生徒は走って行った。
残された智之は少し丘の上から、月規市の風景を眺めてみた。
青い海に生まれ育った街並み。こんな町に殺人犯がいるとは、とても思いたくなかった。
丘を下りて自分の教室に向かうと、なぜか周囲から普段、全く浴びたことのない視線を感じた。
「よっ、智之」
突然現れて腕を首にまわしてくる栄太に、これは何事かと尋ねる。
するとなぜか彼は腕を絞めて絞めて――
「く、苦しい！　てめ、何しやがる……！」
「いやぁ、お前てっきり抜け駆けしない奴だと思ってたんだけどな」
何の話だと聞き返す。
「とぼけんな。朝下級生の女の子と一緒に、手をつないで走る姿が見られてんだよ！」

なぜか栄太は涙ぐみながら、俺もしたことないのにともらしつつ首を絞める。
「あ、あれ見られてたのか！」
「やっぱ事実かこのやろー！」
腕をタップするも、事実だと知ってしまった栄太は全く腕を緩めない。
「はなせ、っつってんだろうが！」
渾身の後ろ蹴り上げが、栄太の股間を的確にとらえる。
「ぐふぅ！　それは、だめだ……ろ」
股間を抑えもだえ苦しむ友人を見下しつつ、朝あった出来事を話す。
「そ、そういうことか。しかし何だな。奥手の智君がそんな積極的になってまぁ」
「お前はどこまで行っても知能は成長しないのな」
ぼけに対して突っ込みすらしない智之に、栄太は完全に拗ねて机に突っ伏してしまった。
これでようやく落ち着けると思ったが、周囲の男子生徒から、異常なまでの殺気をはらんだ視線を向けられ、しばらくは落ち着けそうにはないことを覚悟する。
そしてその放課後はと言えば、噂の元凶となった女子生徒と並んで歩いて帰っていた。
智之が帰ろうとしたところ、校門で待っていた彼女に一緒に帰ろうと申し出を受け、それを承諾したから現状があるわけだが、同時に多数の殺気を浴びる現状を作り出すことにもなった。
「先輩、今日の朝はすみませんでした。それとありがとうございました」
「いや、もう謝ってもらったし、お礼も言ってもらったからいいって」
そういうと女子生徒、門原奏《かどはらかなで》は顔を赤くして顔をそらした。高校一年生の彼女が見せる、本当にかわいらしいし

ぐさに、智之は困り果ててしまう。「で、でもびっくりしたよ。校門で待ってるとは思わなかった……」
「ご、ごめんなさい。その、先輩にもう一回ちゃんと謝ろうと思いまして」
迷惑だったでしょうか？
懇願するような上目づかいは反則だ。
不覚にも智之は純粋な思いを抱く少女にときめいてしまった。
「ま、まあ何だ。良かったのか？　俺の買い物に付き合わせちゃって」
智之は夕飯のおかずや日用品の入った袋を両手に持っていた。奏は持ちましょうかと気遣っていたが、さすがに女の子に持たせるのは申し訳ないと、やんわり断っておいた。
商店街を抜けて通学する堤防沿い。
「じゃあ私はこっちなので、失礼します。おやすみなさい」
ぺこりと頭を下げる奏に、お休みと返して智之も帰宅する。
家でニュースをつければ、やはり殺人事件の続報が取り上げられていた。
「月規市で本日未明、バラバラ死体が発見されました。海に浮いている頭部をライフセイバーが発見し神奈川県警に通報したとのことで、方法が疑似しているということから同一犯とみて、同署は慎重に捜査を進めています。これで死者は七名にも上っており、周辺住民の方は必要時以外は外出しないようにと、警察から通達が――」
本当にたまったものではない。智之は心から嘆息した。
翌朝は昨日にまして、より一層物々しくなっていた。警察は防弾チョッキをつけ、三人一組となって市内を巡察している。
もちろん通学路の所々にも警察は配置されていて、自分の暮らしてきた平穏な街とは思えなくなってきていた。
そんな嫌な気分も、学校に着けば吹き飛ぶようなサプライズが待っていた。
「ともゆきぃ！　てめこの野郎！」

教室に入るや否や、栄太が渾身のラリアットを食らわせようとしてきたのだ。それを腕で防ぐと、くんずほぐれずのレスリングが始まった。
「な、なんなんだてめぇは！　朝っぱらから暑苦しい野郎だ」
智之もいい加減鬱陶しくなり、思い切りけり飛ばす。
だが栄太はそれをものともせず、まるで血の涙でも流すような悲壮に満ちた顔で攻め寄ってきた。
「きいたぞこの野郎！　昨日手をつないだ女子と仲良く買い物してたらしいじゃねぇか！　もうゆるさねぇ。野郎どもやっちまえ！」
栄太の掛け声と同時に、クラスの男子生徒が智之に襲いかかる。
このクラスは殺人事件よりも俺の私情のほうが大事かよ！
心の底からはき捨てると、全力で校舎を駆け回った。おかげでクーラーの利いた校舎内で汗だくになる羽目となってしまった。
そんなことがあった放課後も、なぜか智之は奏と一緒になっていた。またもや校門で待ち伏せをされていた。
今日の理由は、親の結婚記念日のプレゼント選びを手伝ってほしい、というものだった。
当初は断ろうとした智之だったが、上目づかいで懇願されれば断りきれるはずもない。
そして現在、商店街にあるアクセサリーショップに足を運ぶこととなった。
なんて似つかわしくない場所にいるんだ。
深いため息を吐いて横目で奏をみると、目を輝かせてネックレスやら指輪やらを見ていた。
「先輩、先輩！　これ可愛くないですか？」
そう言って指差す先にある、小さいハートの着いた金色のネックレス。
確かにかわいらしいとは思ったが、こういったことに疎い智之はかわいいとから返事しかできなかった。
「もーっ、先輩！　真面目に聞いてください！」

純粋な顔でほほを膨らませて起こるしぐさも、あざとさを感じさせずかわいらしい。また心がときめいてしまう。
「ちゃんと聞いてるって。あ、親へのプレゼントと書いて、実は自分がほしいだけなんじゃないか？」
苦し紛れにからかうと、図星だったようで顔を赤らめ、あわあわと目を泳がせる。
「ば、ばれちゃいました？」
テヘッと舌を出す。ほんとうにこの子は俺を誘っているんではないだろうか？
そんなやましい気持さえ抱いてしまうあたり、彼も青春をしている。
結局親へのプレゼントは、おそろいの腕時計だった。嬉しそうな奏の横顔に、つい見とれてしまう。
「今日は無理を言ってすみません。先輩のおかげでいいプレゼントが選べました」
「いや、選んだのは門原さんなんだしさ？　俺のセンスじゃロクな事にはならなかった」
そういうと奏はなぜか顔を赤めて俯き、そして横目で智之を見る。
「あの、私のことは名前で呼んでください」
ドキッと胸が高鳴る。それはつまり、そういうことなのか？
深読みをして智之も顔を赤める。
名前を呼ぼうか、いやしかしそれじゃまるで……。
悶々とした気持ちで歩いていると街灯に照らされ、歩いてくる人影に気がついた。
「こんな時間に一人で？　って、一人も二人も変わらないか……」
そこでふっと、ニュースのことを思い出した。
『連続殺人事件』
智之は警戒心をあらわにする。奏も智之の裾につかまっておびえた表情を見せる。
「せ、先輩……」

「大丈夫だ」
何かあっても守ってやる。そう意気込み、警戒しつつ人影のいる方向へと歩く。彼らが歩いているのは堤防沿いの一本道。逃げようにも曲がる場所も無い。
もし仮に犯人が異能者だったとして、反転して全力で走っても逃げ切れる気はしなかった。
犯人でないことを祈って一歩、また一歩と人影に近づいてゆく。
すれ違い。高鳴る鼓動とは裏腹に胸が詰まるような息苦しさを覚えた。
通過してから数メートル。つまりでも取れたかのように智之は深いため息を吐いた。
「だ、大丈夫だったな。ほら、もう――」
横を見るが、そこに奏の姿はない。逃げる場所などなかった。それに何より、『腕を掴まれている感覚』だけがある。
「ひっ！　う、嘘、だろ……！」
掴まれている自分の腕を見る。そこは確かに奏の手に掴まれていた。
――腕だけがつかんでいた。
吐き出した。胃に入っている何もかも。本当に内臓まで飛び出してしまうのではないかという嗚咽。
ゆっくりと振り返ればおびただしい血の海に、奏だったとは思えないほどバラバラにされた肉塊。
また吐いた。もう出るものは残っていない。ただ胃液だけを吐き続けた。「チッ、もう一人いやがった。とり目ってのは嫌だね、まったく」
再び街灯に照らされる人影。
百八十センチほどの大柄な男。手には紅の液体に染まる刃渡り八十センチほどのナイフ。
間違いなくこの男が奏を殺した。そう確信すると全力で走りだす。
殺される、殺される、コロサレル！

息が苦しくなろうが、足に疲労がたまろうが走り続ける。だがそれも無駄なことだと、肩の鈍い痛みを感じて理解した。
「い、あがっ！」
よほど深々と切られたのだろう。まるでスプリンクラーのように智之の肩から血が噴き出す。
「逃げんなって。どうせ、逃げ切れない」
これだけの身体能力。間違いなく異能者だった。
「た、助けて……」　自分の血で顔を、体を汚し、それでもなお男に慈悲を求める。
だが彼のそんな懇願も、男の動作ですべて無駄なことだと知る。
「あばよ、せいぜい自分の運の悪さを呪いやがれ」
逆手に持ったナイフを深々と、全体重を込めて胸に突き刺す。
ビクンと智之の体が跳ね、動かなくなる。

――やれやれ、君は本当に死ぬことが好きなようだね。

どこからともなく聞こえる声。女性のものだ。
ほら、正義のヒロインのお出ましだよ。
何を言っているのか、自分はもう助からない。そう思いながらも、近づいてくる足音をその耳で感じていた。
「貴様！　こんなことをしてただで済むと思うな！」　凛として、聞きほれるような澄んだ声。まるで名のある女優ではないかと思う声の女性は、腰の刀を抜き放ち男と対峙する。
「しつけぇな、お前さんは。どうせまた捕まえられないんだからよ、そんな無駄なことはやめようぜ？」
馬鹿にするように言い、鼻で笑う。それが癇《かん》に障ったのだろう、女性は一瞬で男との間合いを詰める。
「さすが、実戦部隊ってとこか。だがな！」
鍔迫り合いになったのも一瞬。男の腕力に女性は押し戻されてしまう。

「このっ！　馬鹿にしおって！」
再び飛びかかる体制をとるが、男は智之を指差す。
「その男だが、まだ死んでねぇみたいだぜ？　確かに心臓を突き刺したはずなんだがね」　その一瞬。生存者だと言われ女性が智之を見た瞬間、男はまるで霞のように闇の中へと消えていった。
「くっ、また、逃がした……」
それが智之の聞いた、最後の言葉だった。

第一話「死」（後書き）

読んでいただいた方、ありがとうございます。雪華改めかん太でございます。

駆け足で第一話を書きあげてしまいましたが、まあ前に投稿したものを知っている方は、まだましになったのではないでしょうか？

主人公また死んでしまいました。さて彼はどうなってしまうんでしょう。声の通り彼は死ぬのが好きなんでしょうか？

なんて冗談を飛ばしつつ、次の話では正義のヒロイン登場です。ヒロインの正体は。智之を殺した男は何者なのか。殺人を犯す理由とは。これからどんどん盛り上がってまいります。

では第二話でお会いしましょう。

第二話　『異能者と死者』

ゆっくりと目を開けると、真っ白な天井が真っ先に目に飛び込んできた。
上半身を起こす。窓を見ると白いカーテンが風になびき、その隙間から夏の日差しが入り込んでいた。
「ここは、どこだ？」
ベッドに寝かされ、腕に点滴をつけられている。そして少しばかり痛む胸と肩。
――そうだ、俺は！
思い出した瞬間、智之の頭は覚醒した。
「に、逃げないと、また奴が――！」
ベッドから飛び出すも、寝てばかりだった体はすぐにいうことを聞いてくれるはずもなく、みっともなく転げ落ちた。
ちょうどいいタイミングでドアがノックされ開く。
転んだ体制で見上げた智之は入ってきた女性の、あまりの美しさに言葉を失った。
上等なシルクを黒く染めたような、つやのある長髪を腰辺りで結い、黒真珠のような黒く大きな瞳にキリッとした顔立ち。何とも凛として古風な雰囲気を醸し出す女性は、まるでよくできた日本人形を連想させた。
「起きられたのか。動けることは結構だが、病み上がりであればしっかりと体の感覚を戻してからにするのだな」
堅苦しい言葉づかい。彼女の容姿ならば、今着ている黒いシャツにジーパン姿ではなく、振りそでなど和服のほうが似合うと確信した。
「私の顔に何か付いているのか？　先程からずっと見られて気になるのだが？」
「あ、いや、悪い」

すっと目をそらすと立ち上がろうとする。だがなかなか足に力が入ってくれない。
「そう無理をするな。君は二週間も眠っていたのだ。その間寝たきり、体がなまるのも仕方なかろう」
女性は智之に近づくと、肩を貸してベッドに座らせてやる。
「ありがとう……」
自然と口からお礼を言ってはみたが、状況が理解できない。智之は男に刺され、確かに死んだと思った。いや、間違いなく死ぬ傷を負わされた。
「なんで、俺は生きていられる？」
肩を深く斬られたし、心臓を一突きされた。自分の体なのに全くわけがわからない。
「君は運が良かったのだろう。たまたま心臓を外れ、異能者の治癒力を持ってすれば持たなくもない傷だった」
「ま、まて！　異能者の治癒力って、俺はただの人間で、そんなおかしな力なんて持ち合わせてないぞ」
傷の癒え方も、確かに周りに比べれば早かったかもしれない。だがそれだけだ。智之にはほかに思い当たるような出来事はなかった。
「何を言っている？　異能者でなければ、あんな傷で生きていられるはずはないだろう」
女性は、落ち着いて聞いてくれと前置きをして話を始める。
「まず君のことについてだが、あの治癒力を見た限り、間違いなく異能者だ。そして異能者と一口にいっても、能力は多岐にわたり、個人でその能力の数や力は異なる。ごく最近になるまで気づかないこともよく聞く話だ。だからまずは、君自身異能者であることを自覚してもらわなくてはならない」
本当に思いもよらなかった話に、智之は動揺を隠せない。
何か言おうとした智之を、最後まで聞いてほしいと押しとどめて話を続ける。

「さて、次に君の置かれた状況だ。まず襲ってきた男は、暴力団の構成員で望月哲也《もちづき　てつや》という。奴が人を襲っている理由は定かではないが、姿を見られた場合に口封じのため殺していると、我々は仮定している」
「つまり、俺は巻き添えを食ったと、そういうわけなんだな」
　棘のある智之の言葉に、女性は少し言葉を詰まらせた。
「その通りだ、申し訳ないとは思っている。そこでだが、私にとある任務を申しつけられた」
「ちょ、ちょっと待ってくれ！　今俺に起きたことの説明をしてくれるのはいいんだけどさ、その前にあんたは何者で、任務って何のことだ？」
　話を聞いていた彼も彼だが、ただでさえ混乱しているのに、全く顔も見たことも無い人間が誰なのかわからず自分のことを話されると余計に混乱する。
「紹介が遅れて申し訳ない。私の名は八隅綾那《やすみ　あやな》。厚生労働省、異能者厚生課の者だ。残念ながら詳しく話すことはできないのだが、異能者厚生課の本部から、君を守るようにという命令が下りた。そこでこれから私が、望月を捕縛するまでの間君を護衛する」
「――は？　なに、護衛？」
　疑問形でいう智之に、そうだ護衛だと肯定する。
「脅してしまうようで恐縮だが、奴は君が死んでいないことを知っている。だから口を封じるためにまた、君のもとに現れる。だから私は命を懸けても君の命を守り、同時に望月を捕縛、もしくは断罪する」
　命を懸けるというその目は愚直で、本当にその覚悟があることを訴えている。
　彼はここから逃げ出したい、こんなことに巻き込んだ綾那に八つ当たりしたい。そういう衝動を、命を懸けるという覚悟を受けて何とか押しとどめる。

そんな彼の衝動をくみ取ったのか、綾那は智之に小包を手渡した。ずっしりと重いそれを慎重に開けると、日本の一般人には全く縁のない、思いがけないものが入っていた。
「これ、拳銃じゃねぇか！」
「そうだ。ベレッタという自動拳銃で、反動も少なく素人でも扱いやすい。きちんと両手で握り、しっかりと相手を狙えば当たるだろう。それにもし当たらなくても望月はひるむであろうし、その音を聞けば私も駆けつける」
手が恐怖に震える。拳銃を持ったことも無い、何より撃てば殺してしまうであろう凶器。
「こんなもん、撃てるわけないだろ！　俺、拳銃を持ったこともないし、人殺しなんて……」
返そうとする智之を綾那は鋭い目つきで睨みつけ一喝。
「君は奴から逃げ切れる自信があるのか？　たとえ当たったことで殺してしまったとしても、それは己が身を守るためのいわば正当防衛。それにこれはすでに組織から許可が出ている。つまり合法的に人を撃てる。後は君が生きたいと強く思い、引き金を引くだけだ。それに先程いっただろう？　当たらなくても威嚇にさえなればいい」
そうだ、当てなければ何の問題も無いんだ。智之は覚悟を決め、強く拳銃を握り締める。
「あ、あまり強く握るな。暴発するかもしれんからな」
ビクッとして智之はゆっくりと拳銃を膝の上に置いた。
「冗談だ。今弾は入っていないから安心しろ」
――このアマ、いつかヤキ入れたる。
こんなときには冗談を飛ばすといいという上司の言葉を信じて言ってみた綾那だが、恨めしそうな智之の視線を受けてたじろぐ。
咳払いを一つ、気を取り直して拳銃の説明をすると弾を手渡す。
「いま、ここで弾をこめて用意しておけ。最悪、今夜襲ってくるやもしれん」
手渡された小さい箱を開けると、九ミリの弾が六発入っていた。

震える手で一発手に取ると、言われるがままホローポイント弾、通称ダムダム弾をマガジンに込める。
「弾について少しだけ補足説明しておく。異能者に通常の九ミリ拳銃弾はあまり効果がない。すぐに傷が癒えてしまうからだ。だが君に大きな銃を撃つのは無理がある。そこでその弾の出番というわけだ。ホローポイント弾と言って詳しい説明は省くが、弾が人体を貫く際に与える損傷を大きくすることで相手の動きを一時的に止めることができる。とはいえ、やはり異能者相手では気休め程度でしかないが」
　そんなことをいって、この女はやはり男を殺させたくはないのではなかろうか。などと勘繰ってみるが、智之自身人を殺す気は更々無い。
　人殺しなんて最低の人間がすることだ。
「もし、落ち着いて狙えるのであれば望月の顔の中心を狙え。よほど運が良ければ多少それても頭を撃ちぬけるだろう。異能者といえど、脳を損傷しては生きることは不可能であるからな」
「あんた、俺に殺させたいのかそうじゃないのか、はっきりとしてくれ。まあ殺させたいといっても、俺は絶対人殺しなんてしねぇ」
　拳銃を枕元に置くと、綾那を睨みつけて吐き捨てる。だが彼女は鼻で笑い、勘違いするなと返す。
「よほど運が良ければといっただろう？　落ち着いてと言ったのはそれを心掛けろということだ。まして拳銃を持ったことも無い君が、頭部を狙い撃てるとはとても思えん」
「なっ！　なら何でそんなことを言うんだよ！」
　意味も無いのに落ち着いて狙えだの、頭部を撃ちぬけだの、到底恐怖を刻み込まれている彼ができようはずもない。
「なに、護衛だと言ったが私としては、ただ君がおとりになってくれれば殺そうとする間に付け入り、切り捨ててやろうというだけの話。陽動さえしてくれれば私は満足だ」
「お前、俺がどうなってもいいって？　だったら奴が来たらお前が

いることも伝えて、ついでに今の会話の内容もバラしてやる」
やれやれ、と綾那は肩を竦《すく》める。
「別にかまわんが、その時は君が死ぬ時だ。次こそ奴は君を殺すぞ？　それに私が今話したことを奴に言ったとして、ならば私は別の機会を待てばいいだけの話だ」
頭が沸騰した。殴りかかろうとも思ったが自由の利かない体ではそれも叶わない上、異能者である彼女に向って行ったところで返り討ちにされるのが目に見えている。
だからと言ってこれ以上反論すれば必ず綾那にいいようにあしらわれるだけだと思った。
反論してこないことをやるべきことを理解したととった綾那は、智之に背を向けて「せいぜい男らしく、負けず嫌いなところでも見せておけ」と言い残して部屋を去っていた。
その一言で智之は、いいように誘導されたことを知る。
ムキにさせておいておけば、何の覚悟もしない人間よりは前向きに行動するだろう。
智之は深いため息を吐くと、ベッドに仰向けになる。
「殺しはしない。でも、やれることはやってやる……」
ここまで女性にいいように言われて、男としての意地が黙っているはずもない。陽動だろうが何だろうがやってやると吠える。
それをドアの外で聞いた綾那は、男の子はこうでなくてはとつぶやいてその場を後にする。
その夜、智之は手に拳銃を持ち、男が現れるのを待った。
待つ、時計が深夜零時を刻み、丑三つ時を過ぎても布団の中で人がやってくるのを待った。
何時になっただろう。睡魔に負けそうになっている智之の耳に、甲高い足音が聞こえてきた。
来た、奴だ！
隣の部屋のドアが開く音、向い側の部屋のドアが開く音。次はここだ、と覚悟を決め拳銃を握り締める。

ガラリ、とドアが開くと同時に智之はかぶっていた布団をはいで起き上がり人影に銃を向ける。
「う、うごくなぁ！」
と、そこまでは良かった。
決まった、と心の中で軽い優越感と、それでもぬぐい切れぬ恐怖心から手が、体が震える。
一方銃を向けられた人影は、凶悪な背の高い男でもなければ綾那でもない。
「き、きやぁぁぁぁぁあ！」
超音波ともとれるような耳の痛くなるほど高音の悲鳴を上げ、影の主である女性看護師は持っていた懐中電灯を投げ捨てて逃げ去っていた。
「――あ、あれ？　はっ！　違うんですぅ！」
弁解しようにもすでに看護師は、ナースセンターに逃げ込んでいるところであった。
その夜は悲鳴を聞いた警備員が駆け付けたり、見知らぬ入院患者が眠りを覚ました元凶を睨みつけに着たりと、まさにやる気が空回りすることとなった。
「あっ、ははは！　笑いが止まらんぞ。本当に面白いことをしてくれるな」
翌朝事情を聞いた綾那は、智之の部屋で腹を抱えるほど大笑いしていた。
本人もいつぶりにこれだけ笑っただろう、と目に涙まで浮かべる始末。
「わ、笑い事じゃねえよ。おかげでこの部屋に警備員は殺到するわ、婦長さんには怒られるわ、患者さんから痛い視線をうけるわで、散々なんだぞ？」
これもお前がたきつけるから悪いんだと瞼が鉛のように重い目で睨むが、いまだに綾那は笑いを抑えようと必死に噛み殺していた。
「いや、自業自得であろう。本当にどうしようもないな、目の下に

クマまで浮かべて」
　また噴き出しそうになる衝動を必死に抑える綾那に対して、とにかく寝たいという衝動を利用して布団にもぐり、完全に無視して眠ることにした。
「そうむくれるな。まあ昼間は襲ってこないと見積もっていいから、ゆっくりと休めそれに私もすぐそばに控えている」
　焚き付けた元凶が何を言うのか。
　なんにせよ昼に襲ってこないという言葉を信じ、智之は眠りに就くことにした。
　部屋をでて、ドアを閉めた綾那は一言。
「今夜、か……」
　そうつぶやいた。
　その夜もまた懲りず智之は拳銃を握り締めて布団にもぐりこんでいた。同じ失敗をしてたまるかと、今度は布団の隙間からジッとドアを凝視する。
　それから何時間。全く同じことを昨日もしてたな、などとあくびを掻きながら思う。
　また看護師に銃を向けたら、今度こそ追い出されるな。
　そんな冗談じみたことを思えるあたり、昨日の出来事のおかげで少しは余裕ができたのかもしれないと思う。
　すると今度は音も無く、ゆっくりとドアが開いた。
「みーつけた」
　小声で呟くような男の声。間違いなく望月哲也本人だ。
　先程の余裕はどこへ行ったのか、体が恐怖に震える。
　昼間とは違いカーテンからさす月の光が凶悪で巨大なナイフの刃を照らし、ギラギラと光っていた。
「さーて、冥土への旅路ですよっと」
　ゆっくりとナイフを振り上げ一歩、また一歩と智之に近づいてゆく。
　恐怖で意識が飛んでしまいそうなほど、頭に血が上ってボーっと

する。
よし、やってやる！
あと一メートル半と近づいたところで、勢いよく起き上がった。
「――お前！」
綾那が近くにいることは計算に入れていた。
可能な限り音を消し、気配を消し入った哲也は油断していた。まさか智之が銃を持っていようとは。
「こんにゃろー！」
両手でしっかりとグリップを握り、わけもわからず銃口を体の中心に向けて引き金を引く。
甲高い炸裂音。
銃口から散った火花が部屋を一瞬、月光より明るく照らす。
「チッ……！」
舌打ちをすると同時に体をねじり銃の射線から逃れようとする。
だが発射された弾丸は男が体をひねるよりも速く、脇腹を貫いた。
激痛に顔をゆがめ、血が流れる脇腹を手で押さえる。
そして智之に対し、これまで以上に殺気を孕んだ目を向ける。
「そ、んな……」
銃を向けようとするも手が動かない。
手だけではなく体すら動かない。できることと言えばただ、男を見ることだけだ。
蛇に睨まれた蛙とはまさにこの状況のことを言う。智之は理解した。本当の恐怖を感じると体が動かなくなるということを。
「舐めた真似、してんじゃねぇよ！」
冗談交じりに殺そうとしていた先程の姿はどこへ消えたのか。一蹴の跳躍で智之までの距離を詰める。
――し、ぬ？
叫ぶにしてももう遅い。ナイフはもう後数センチで智之の胸を貫く。
「――させない！」

どこからともなく現れた綾那は、手に持つ日本刀で哲也の腕を斬り落そうと振り上げる。
「おまっ、いつの間に！」
察知しとっさに後ろに跳び退くも、綾那の追撃は逃げることを許さない。
ひと振り、ふた振りと斬り込むたびに月の光を浴びる刀の刃は光の尾を引き、闘う姿は殺し合いともいえぬ、何とも美しく飛ぶ蝶の姿を連想させた。
本当に舞うように刀を振るい、羽のように光の刃が広がり煌めく。
「なるほど、屋内でも障害物との間合いを測って振ってやがる。ちょい俺のほうが舐めすぎたな」
横なぎに振われた刀をナイフの鍔で受け止め、押し返す。同時に綾那の腹部を一蹴り。
今度は綾那がベッドの前まで飛び退く。
「さて、遊びは終わりだ。狭い部屋では俺の得物のほうが有利だぜ？」
男の言うことを綾那も理解している。狭い部屋の中を日本刀で戦うほうが、振り方に制限が出て全力では戦えない。
――だからこそ決意した。
智之の襟をつかむと背負い投げの要領で背に担ぐ。
「飛ぶぞ！　どこでもいい私につかまっていろ！」
仰向けの状態で背負わされているのに、私につかまっていろとは何とも無茶な注文だった。
「と、飛ぶって……！」
困惑する智之の了承を待たず、ベッドを踏み台に窓へ跳躍。
ガラスを突き破って三階の窓から飛び出す。
「――っ！」
落下する感覚はジェットコースターの急降下にも似た感覚を与える。
息がつまり、叫びたくても言葉が出ないのだ。

病院の中庭。芝生の生えているあたりに着地するが、二倍以上の重量と約二十メートルから着地した衝撃に、足は耐えられなかった。
「くっ、ああっ！」
受け身をとることもできず、智之だけには衝撃を与えまいと地に足が着いた瞬間何とか横転し、二人は絡まるように転がった。
勢いが無くなり、芝生の上で止まると起き上がろうと足に力を入れる。
だが着地の衝撃で足首を捻挫したらしく、生まれたての小鹿のようにふらふらと立ち上がるのが精いっぱいだった。
「――痛っ。そうだ君、大丈夫か！」
と、智之に目をやるがピクリとも動かない。
まさか。悪い予感が浮かぶ。
刀を杖代わりに、力の入らない足を引き摺り千鳥で智之のもとへ近づいてゆく。
「き、君――！」
心配にひきつった顔で覗き込んで、彼女は智之が動かない理由を理解した。
――気絶しているだけではないか！
白目をむいて、恐怖に口の端をひきつったままの表情で気絶。本当に心配した自分がばかばかしくなってくる。
「やれやれ。まさか窓から飛ぶとは思わなかったぞ」
ゆるんだ空気は再び緊張の糸が張りつめたかのように、冷たい緊張に包まれる。
「さぁて、そんな足じゃもう戦えねぇだろ？　おとなしくその小僧が殺されるのを見てろよ」
その言葉に反発するよう杖にしていた刀を構えなおし、切っ先を哲也の喉元に向ける。
支えなく自身で支える脚は震え、もう跳躍することはおろか走ることさえできないことを訴えている。
「私は、まだ戦えるッ！」

「やれやれ、気丈なこって。だがな、お前に興味はないんだ」
跳躍し、綾那の横をすり抜けて智之を狙おうとする。だが捻挫した左足で踏み込み、刀を伸ばしてそれを阻止する。
左足に響く鈍い痛み。もうこれ以上動かせば、間違いなく捻挫した足は動けないほど損傷してしまう。
「邪魔、してんじゃねぇよ、碌に動けねぇくせによ！」
ケガをしても尚智之を守ろうとする綾那が疎ましくなり、目標を変える。
一撃で殺せるであろう哲也は、だがあえてそうしない。左足に負担がかかるように綾那の左側へ執拗な攻撃を加える。
「くぅっ！　この……」
攻撃を刀で受けるたび、その衝撃で痛みが走る。
「いったい、何が……」
智之が目を覚ました時、綾那の肩口を斬られる瞬間を見た。
「おら、小僧も起きたことだしよ。そろそろお前死んどけや！」
脇腹、足、腕。綾那の体に次々と凶刃の跡が刻まれる。
そのたび苦痛に顔をゆがめるも、その場から一歩も引こうとしない。
「何でそこまでして、その小僧を守ろうとしてやがる！　死にてぇか！」
気丈というには、あまりに死の覚悟をしているような綾那にいら立ちを覚え、攻撃を加えつつ吠える。
「約束、だからだ……！」
精いっぱいの踏み込みつつ刀を大振りし、何とか哲也に距離を取らせる。
一方距離をとった方は、怪訝そうな顔をする。
「約束だと？　どんな約束かしらねぇが、そんなもんで手前の命を投げようってか？　馬鹿げてるぜ」
「馬鹿げてなどいないさ。私は彼を守ると約束した。私の命を懸けても、君を守ると！」

もうたつことすらままならない足、満身創痍の体、しかしその目は覚悟と意思をはっきりと映し出していた。
「こ、このっ……！」
今斬り込めば、間違いなく綾那を一撃で葬り去ることができる。異能者との闘いなどできるはずのない智之などは虫を踏む潰す程度の事。
だが哲也は動けない。
綾那の気迫、覚悟、純粋な思い。
「くっそぉ！　馬鹿にしやがって！」
大きくナイフを振るい空を斬ると、再び綾那に殺気を向ける。
「そんなに守るってんなら、地獄で閻魔から守ってりゃいいだろうが！」
思い切り怒鳴り、斬りかかろうとしたところで男は踏みとどまる。彼の前に突然白衣の女性が現れたのだ。
しかもその顔は確かに見覚えがあった。
「おいおい、何の冗談だよこりゃ……。どうやって生き返りやがった。継接ぎして元に戻した人形ってわけじゃ、ねぇよな？」
「私の体に継接ぎは見えるかね？　れっきとした人間だよ」
その後ろ姿、声、何もかも智之の記憶にあるものだった。しかもごく最近。
「おまえ、どうして……」
「やれやれ、手間をかけさせてくれますねぇ、先輩は」
小さくかわいらしい顔に呆れた表情を浮かべて智之に向ける。
「――門原、奏……！」
上着である白衣の両ポケットに手を入れ、科学者とも医者ともとれる容姿で智之を遠目から見下げる、肉塊と化したはずの奏。
「いやですね、名前で呼んでほしいとは言いましたが、フルネームでとは言ってませんよ？」
冗談を飛ばし、あざとさを感じさせないかわいらしいほほ笑みを浮かべるその表情は、心ときめかした門原奏その人だった。

第二話　『異能者と死者』（後書き）

読んでいただいた方ありがとうございます。

ネタが思いつくうちに早々と投稿です。

あとがきから読む人がいたらすみません、すこしネタばれっちゃいます（汗

普通の人間だと思ったら異能者、死んだと思ったら生きてた、そして死んだと思った後輩も生きてた。

こう書くと意外なことばかりが起こってるような気がしますね。なんか序盤なんですがちょっと自分では飛ばしてる感が否めないところです・・・

今回はようやくメインヒロイン的キャラが登場しました。

やっぱり日本刀を持つ女の子っていいですよね？　そそりますよね？　脳汁あふれ出しますよね！？

・・・あ、僕だけっすか？

おまけに死んだと思ってた奏でもあらわれてカオスなことになっております。

この二人が主人公に、物語にどう絡んでいくのか、ぜひとも彼女たちの活躍に期待していただきたいと思います！

（え、主人公はって？　野郎は知らん！）

というわけで駆け足で書いております本作、次回も見てくれたら、うれしいと思います。

というか絶対うれしいっす！

ではこのあたりで、ぜひ次回もお読みいただければ幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9274w/

死んだ少年は死ねない

2011年9月27日02時30分発行